

# I 環境科学研究科の現状と展望

# 環境科学研究科の現状と展望

河村 武\*

前号以後、最近までの約1年間の研究科の状況と、関連事項について要約する。昭和58年度は国家予算（一般行政費）は、伸び率ゼロ、さらに来年度はマイナス7%というきびしい状況下におかれている。研究科の学生定員・専任教官の定数は増員がない。しかし、内部努力によって内容の充実がはかられている。

## 1. 研究科の人事

この1年間は、研究科内の人事異動が少なかった。昭和57年7月1日付で谷村秀彦助教授（社会工学系）の教授昇任、昭和57年7月15日付で小林守技官の講師（地球科学系）就任、昭和58年4月1日付で新美育文助教授（社会科学系）の横浜国立大学経済学部への転出、昭和57年6月1日付で富山慶典氏・昭和57年10月16日付で松本宏氏・昭和57年11月1日付で伊藤真人氏の技官（準研究員）の採用があった。

57年度の本研究科担当教員数は58名（12学系）内訳（専任27，兼担31名），非常勤講師15名の計73名であった。研究科の技官7名，事務官は2名である。

## 2. 教員会議の運営および構成員

定例の教員会議は従来どおり月1回（8月を除き原則として第3水曜日）に開催した。人事等の重要事項を審議する教授間協議会は原則として月1回（第1水曜日）に開いた。研究科運営のための常置委員会は、運営、カリキュラム、就職、入試、実習、編集の6つである。なお、運営委員会の中に会計小委員会を、また英文研究科案内作成のため、高野健三教授を委員長とする小委員会を編集委員会の中においた。昭和57年度の教員会議および各委員会の構成員は表1～7のとおりである。

## 3. 教育活動および研究活動

57年度は56年度の基本路線を踏襲したのでとくに変わった点はないが、夏休み中に実施する野外実習には一層の力を注いだ他、研究科のプロジェクトとして、前年度に引き続いて霞ヶ浦プロジェクトを推進した。また柏市からの受託研究として「柏市の環境診断」（世話人 吉川博也講師）を新

---

\* 環境科学研究科長

たに研究科のプロジェクトとして研究教育の両面に役立てることになった。

また、近年、研究生とくに外国人留学生の増加が目立つ。国内の研究生は、従来から年に10名程度あり、就職や進学のためのものが多かったが、外国人の研究生はいずれも、一年間程度の勉学期間を経験した後、正規の大学院学生となる希望を持っている（昭和58年8月現在4名）。このような傾向は、他の研究科でも最近みられるが、とくに環境科学研究科では中国政府派遣留学生を2名受け容れたことなどもあって、現在、中国、台湾、韓国、タンザニア、アメリカなどからの留学生が在籍している。このような事情も考慮し、海外からの研究科に対する問合せや、視察の資料としても役立つよう、高野健三教授を中心に英文の研究科案内を作成した。

表-1. 昭和57年度教員会議構成員

	氏名	所属学系		氏名	所属学系
教授	相原良安	農林工学系	助教授	黒川 洸	社会工学系
教授	石塚皓造	応用生物化学系	助教授	斎藤 功	地球科学系
教授	岩城英夫	生物科学系	助教授	佐藤洋平	社会工学系
教授	奥野隆史	地球科学系	助教授	高橋正征	生物科学系
教授	川喜田二郎	歴史人類学系	助教授	田島 學	社会工学系
教授	川手昭二	社会工学系	助教授	手塚敬裕	化学系
教授	河村 武	地球科学系	助教授	新美育文	社会科学系
教授	河野博忠	社会工学系	助教授	藤井宏一	生物科学系
教授	新藤静夫	地球科学系	助教授	前田 修	生物科学系
教授	高野健三	生物科学系	助教授	森下豊昭	応用生物化学系
教授	高原榮重	農林工学系	助教授	安田八十五	社会工学系
教授	谷村秀彦	社会工学系	助教授	若林時郎	社会工学系
教授	土肥博至	芸術学系	講師	安仁屋政武	地球科学系
教授	中村以正	応用生物化学系	講師	天田高白	農林工学系
教授	橋本道夫	社会医学系	講師	大橋 力	応用生物化学系
教授	藤原喜久夫	社会医学系	講師	熊谷良雄	社会工学系
教授	村上和雄	応用生物化学系	講師	小泉允圀	社会工学系
教授	山中 啓	応用生物化学系	講師	小林 守	地球科学系
教授	吉田富男	応用生物化学系	講師	国府田悦男	応用生物化学系
教授	渡部與四郎	社会工学系	講師	下條信弘	社会医学系
助教授	糸賀 黎	農林学系	講師	田瀬則雄	地球科学系
助教授	鶴野公郎	社会工学系	講師	田林 明	地球科学系
助教授	及川武久	生物科学系	講師	吉川博也	社会工学系
助教授	掛谷 誠	歴史人類学系	講師	中村 徹	農林学系
助教授	梶 秀樹	社会工学系	助手		

(議長 河村 武)

表-2. 運営委員会

委員長	河村	武
副委員長	山中	啓
委員	前田	修
委員	手塚	敬裕
委員	高橋	正征
委員	糸賀	黎
委員	藤井	宏一
委員	森下	豊昭
委員	掛谷	誠
委員	新美	育文
委員	田瀬	則雄
委員	吉川	博也
事務	伊藤	真人

表-3. カリキュラム委員会

委員長	中村	以正
委員	石塚	皓造
委員	高橋	正征
委員	鷗野	公郎
委員	若林	時郎
委員	天田	高白
事務	緒形	隆之

表-4. 就職委員会

委員長	吉田	富男
委員	高原	榮重
委員	田島	學
委員	森下	豊昭
委員	前田	修
委員	天田	高白
委員	吉川	博也
事務	腰塚	昭温

表-5. 入試委員会

委員長	石塚	皓造
委員	鷗野	公郎
委員	及川	武久
委員	谷村	秀彦
委員	下條	信弘
委員	安仁屋	政武
事務	齊木	崇人

表-6. 実習委員会

委員長	新藤	静夫
委員	森下	豊昭
委員	新美	育文
委員	糸賀	黎
委員	藤井	宏一
事務	齊木	崇人

表-7. 編集委員会

委員長	河野	博忠
委員	高野	健三
委員	手塚	敬裕
委員	及川	武久
委員	小泉	允圀
委員	国府田	悦男
委員	田瀬	則雄
事務	腰塚	昭温

このように、海外からの留学生が増加することは、当研究科の役割を考えると望ましいことではあるが、部屋や予算の制約など多くの問題が付随的に生じるので、今後慎重に対処する時期に来ている。

なお、57年度入学者は65名、修了者は68名である。57年度入学者のうち有職者は4名で、途中退学者は3名である。修了者のうち、55名はほぼ希望どおり就職した。

#### 4. 研究科の予算

創設期が終り、基本設備費や未整備分野を対象とする予算がなくなったため、基本的には、学生当り積算校費だけで運営しなければならない極めて困難な状況に立至った。そこで、全学的な配慮に

より暫定的に教官研究費の2%を控除して、修士課程研究科の経費にあてる救済策がとられた。このために、ほぼ56年度並みの予算が確保された(表8)。また、このほか概算要求による新設分野等の設備費として、環境制御培養実験装置がとくに認められた(22,000,000円)。研究科の運営のためには、今後も恒常的にこのような予算的配慮がぜひとも必要である。

表-8. 環境科学研究科予算

(単位 円)

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度
学生当積算校費	0	3,281,000	7,489,000	10,195,000	11,290,605	12,167,000	12,327,000
設備費	10,000,000	62,000,000	50,349,000	35,969,000	44,247,000	12,160,000	22,000,000
基本設備費	0	4,400,000	2,500,000	4,718,000	2,700,000	2,000,000	8,893,000
教育経費	0	2,000,000	0	0	0	0	2,342,000
校費重点配分	0	19,951,000	9,099,000	6,430,000	4,850,000	6,207,000	0
先行使用	0	1,500,000	0	10,000,000	23,400,000	0	0
	10,000,000	93,652,000	69,437,000	47,312,000	86,487,605	32,534,000	45,662,000

## 5. 国立大学大学院環境科学研究科長会議および合同研究発表会

前年度の研究科長会議の決定にもとづいて、筑波大学環境科学研究科が当番校となり、環境週間の間の昭和57年6月11日に第1回合同研究発表会が国立公害研究所大山記念ホールで開催されたことは、前号に掲載したとおりである。

第5回国立大学大学院環境科学研究科長会議は、昭和57年8月19日に北海道大学環境科学研究科で開かれ、本学からは筆者の他山中啓教授と山崎昭夫大学院課教務係長が出席した。北大では、第1回に次いで2回目の会議であったが、研究科の新しい立派な建物に、他大学の出席者から羨望の目が注がれた。議題は、筑波大学から環境科学研究科合同研究発表会の今後の運営について、広島大学から合同教育について、北海道大学から環境科学研究科の教育研究組織についての三つであった。合同研究発表会は持回りとして、今後はシンポジウム形式の発表も含めることになり、次回は東工大が担当することになった。合同教育は現状では解決策はむずかしいが、今後なお努力を続けること、北大提出議題については各大学の現状の紹介が行なわれ、今後とも広く環境科学関係研究者向の情報交換や協力指導態勢を密にする方法を考えることが申し合せられた。

第6回は筑波大学が当番校で58年7月下旬～8月上旬の間に開催することになった(第6回の研究科長会議は、昭和58年7月27日筑波大学で開催された。詳細は次号に報告する)。

## 6. あとがき

予算の節約が迫られている時期でもあり、なるべく簡潔に記録をとどめるよう、また前号と重複を避けるよう努力したので、読みづらい点も多いが、御容赦いただき、前号を参照していただくようお願いしたい。